

欲望の解放

— トランスパーソナルの視点から —

鈴木 晋 怜

欲望の解放

—トランスパーソナルの視点から—

鈴木 晋 怜

はじめに

説一切法清浄句門。所謂妙適清浄句是菩薩位、欲箭清浄句是菩薩位、愛清浄句是菩薩位、… 味清浄句是菩薩位。何以故、一切法自性清浄故、般若波羅蜜多清浄 …。

言うまでもなく、われわれが毎日、朝の勤行で、あるいは諸法要でくり返し、くり返し、読誦している『般若理趣経』の、いわゆる十七清浄句と言われている一節である。

この十七清浄句の解釈については、単に字の表面的な意味だけを捉えたのでは、本来の深遠な密教の世界を曲解するとして、きわめて慎重に取り扱われてきた。弘法大師空海も『般若理趣経』を秘経として、門外の者にこの秘経の趣旨を伝えることを拒絶されたのは誰もが知ることである。

しかし、その一方で、われわれ真言宗徒は常用教典として、この秘経を日々、読誦している。このことに対す

る教理学的な必然性の解釈は専門家に譲るとして、一見この矛盾した現象は、人間の欲望、とりわけ、その中でも最も強烈な性の欲望が、悟りの源泉となるということに対するわれわれのアンビバレントな思いが投影されているように、筆者には思えてならない。

男女が愛欲をもって心を射抜き、抱擁し合い、思いのままに奔放に愛撫し、あらゆる感覚を味わいながら、ついに互いの性欲を満たすこと。それらはすべて菩薩の境地であって、何ら、やましいことはない。密教のこの大楽思想は、人間がもつありのままの欲望の全面的な肯定であり、さらにはそれを聖なるものとして昇華したと捉えられよう。

さらに『理趣広経』には、次のような苦行否定論さえもが展開されている。

「過度の困難な律儀によつては、身体は疲労困憊する。

労苦によつて心は散乱し、散乱によつて悉地（宗教的成就）は困難になる。

それゆえ何でも好きなことをなし、また何でも「好きなものを」食べ、

何でもやりたいことをやって、何でもやりたいだけ修行をする。

立つてもよし、あるいは坐るもよし。行くもよし、あるいは止まるもよし。

よく笑い、また談ずるもよし、何でもあるようでよろしい。

「たとえ」曼荼羅に入らず、諸々の障碍をもつ者であっても、

我は本尊と瑜伽しているというだけで、その通りになるであらう」⁽¹⁾

「精神と身体が健全になると、一切の快樂が堅固になる。」

「⁽²⁾ 労苦は散乱をもたらし、破滅をもたらすこともある」

ここでは、ありのままの自己の欲望に従って振る舞うことが、そのまま悉地（宗教的成就）につながるということが説かれている。（ただし、一切の快樂が堅固になるためには、精神と身体が健全であることが条件となっていることは忘れてはならないが。）

この全面的な欲望肯定こそが密教の真髓であり、それを禁欲主義的に解釈することの方が、かえって密教をあるいは人間存在を曲解することになると筆者には思われるが、しかし、こうした思想は、欲望を抑圧し、禁欲的に修行することによって解脱あるいは救いへの契機を見いだそうとする多くの宗教とは明らかに異なるものであるということもまた確かなことである。

そこで本論では、人間の欲望のあり方について、心理学の新しい潮流である人間性心理学、あるいはトランスパーソナル心理学の視点から論じ、さらには、そこにおける欲望のあり方が密教の世界観とどのように通じているのかということについても、若干の考察を加えてみたい。

人間の欲望のあり方

人間性のありのままの表現、特に欲望を満足させることは、宗教に限らず、様々な領域において、価値や道徳と真っ向から対立するものと考えられることが多かった。欲望と道徳とは二律背反であり、人間の行動は「欲求の満足か、それとも価値の実現か」という形でその選択が問われてきた。欲望を否定することが価値を生み、逆にまた、欲求を肯定し、満足することが道徳に反する罪悪であるかのような禁欲主義的人間観が、とくに西欧キ

リスト教社会においては、往々にして支配的な考え方となっていた。

とりわけ、近代になると心身二元論の台頭に伴い、理性的精神が重視され、身体というものが疎外されるようになった。われわれが身体を疎外してきた所以は、身体には必ず欲望が伴うからである。身体的欲望は常に悪へと向かう傾向があり、それがある限り、人間は善なる存在にはなれない。また、欲望は止めどなく肥大化するものであって、欲望の充足に駆り立てられている限り、人間はいつまでも平安を得られない。だから欲望は、克服されるべきであり、それを滅することが目標とされるのである。事実、多くの宗教には、その教義のなかに、人間の行動規範あるいは原理を組み込んでいる。「くするなかれ」「くすべし」という宗教の戒律は、肥大化する欲望を抑えることによつて平安を得ようとする手立てとして設定されている。

しかし、果たして人間の自然な欲望とは、ほおっておけばいつまでも止めどなく悪へと肥大化していくものなのだろうか。

人間には様々な欲望がある。そして、そのあり方は、動物のもっている欲望（欲求）とは全く異なっている。動物の欲望はそのほとんどが本能という生得的なプログラムによつて制御されているのに対して、人間の場合は、もちろん、動物と同じような本能的欲望も与えられているが、その場合でさえ、本能の支配から免れて、あるいは逸脱している。たとえば動物の性欲は生殖のためにあり、時期的に限定されたなかで性行動が行われる。動物は、自身の安全を確保するため、あるいは自身の食欲を満たすために、他者を攻撃し、殺戮するが、その目的が達成されればそれ以上の攻撃・殺戮は行わない。それは本能によつて、制御されているからである。しかし、人間の場合は、言葉をもつことによつて自我をもち、自我によつて、本能を操作する。なんらかの欲求が生じたとき、それに素直に従うのではなく、一時的にそれを押しとどめたり、あるいは、それを加工したり、デフォルメ

して、もともとの欲求を変質させたりもする。動物のように欲求と行為がストレートに結びつかず、その間には、広大なイマジネーションの世界が広がっていく。その意味においては、人間の欲望は限りなく肥大化し、歯止めがきかない。村上陽一郎はそうした人間の欲望のあり方について次のように述べている。

人間は楽しむために殺し、楽しむために食べ、楽しむために性行為をする。いずれの場合にも、本能的な制御機能は発動しない。それどころか、前頭葉のおかげで、想像力と意志とは「欲望の拡大」あるいは「欲望の開発」まで及ぶ。「楽しむ」ためには、人間はその想像力と創造力を最大限に活用する。その意味で、人間の欲望には、本能的な制御機能がないばかりか、むしろそれを過剰に拡大し、開発する機構が備わっていることになろう。

しかも大切なことは、「過剰」は容易に「不足」を生み出すという逆説である。想像のなかでの欲望の「拡大」の可能性は、同時に「不足」あるいは「非充足」の現実をも生み出す。ここには「過剰即不足」というディレンマがある。⁽¹⁾

村上が指摘するように、過剰に拡大した人間の欲望は同時に満たされないという感覚を生み、それがさらなる欲望の肥大化をもたらすという悪循環に、人間を貶めていく。

しかし、肥大化する欲望は、常にわれわれを悪の方へと向かわせるだろうか。果たして、われわれは、止めどなく肥大化しながら悪へと向かう欲望に翻弄されて、その虜になっていくだろうか。もし、そうだとすれば、それは、あまりにも欲望を悪と決めつけ、善なる理性によってそれを抑圧しようとしすぎたが故に、かえって欲望に支配されるという結果を生じさせたと解釈すべきではないか。

人間の欲望（欲求）の有り様について、マズロー A、H は、興味深い説を唱えている。マズローは、アメリカの心理学界の第一、第二勢力である行動主義心理学と精神分析を批判し、第三の勢力すなわち人間性心理学を確立し、さらには第四の勢力であるトランスパーソナル心理学を打ち出した心理学者であるが、彼は、行動主義や精神分析にみられるような人間を常に低次あるいは暗い側面に還元して捉えるような傾向を批判し、可能性、創造性、成長、価値、自己実現など、人間の高次な側面に焦点をあてた積極的心理学を提唱した。彼は、愛情経験や性的快感の歓喜、恍惚、絶頂感といったものから、自己実現的、創造的、美的経験、洞察経験、さらには非日常的な神秘体験までを対象とした研究をもとに、人間の基本に関わる一つの仮説を提出した。

それは、人間には、生得的・本能的で、基本的な諸欲求があり、それらは、次のように階層的に存在している。

- ① 「生理的欲求」： 人間の生理的ホメオスタシスを維持させるための欲求。
- ② 「安全への欲求」： 安全、安定、依存、保護、恐怖・不安・混乱からの自由、秩序への欲求。
- ③ 「所属と愛情の欲求」： 社会の一員として認められたい、人々から愛されたいという欲求。
- ④ 「尊重の欲求」： 個人が主観的あるいは客観的に自己をより高い位置に置こうとする欲求。
- ⑤ 「自己実現の欲求」： 自分がこうありたいと思うこと、自分に最もふさわしいと、自分の力を最大限に発揮できることをやろうとする欲求。
- ⑥ 「自己超越欲求」

この最終的な段階に至ると、一切の二元的構造が克服され、世界は一つの全体として統一されていく。すなわち、利己主義と利他主義、個人主義と全体主義、楽観主義と悲観主義、現実主義と理想主義、積極性と消極性、共通性と独自性、主観性と客観性、思考と体験、自由と必然、善と悪、愛情と憎悪などといった互いに矛盾し、

対立する二元的傾向が、統合、超越され、利他的であると同時に利己的、ディオニソス的人間であると同時にアポロ的、個人的と同時に社会的、合理的と同時に非合理的、聖なるものと同時に世俗的、受動的と同時に能動的、価値的と同時に事実的というように、統一調和的に世界が認識されるようになるのである。つまり、「あれかこれか」という選択による二分法的な対立は超越され、あらゆるものが矛盾することなく、融合統一の方向に向かうのである⁽⁴⁾。

この段階における人間は、当然、理性と欲望の対立といったことも超越しており、自分の思いの赴くままに、自在にふるまうことが、人工と自然という対立も超えたあるがままのそれになうのである。そして、重要なことは、そうした段階に至るためには、それ以前の段階の欲求が満足されていることが条件であり、前段階の欲求がある程度、満足されれば、自ずから次の段階の欲求が生ずることである。低次な欲求から高次な欲求へと移行していくプロセスそれ自体も、実は生得的・本能的な欲求なのである。逆に、前段階の欲求が満たされなかったり、あるいは過度にそれを押さえ込み、抑圧した場合は、それに執着し、その人のパーソナリティーに固着していく。例えば、一番低次な欲求である「生理的欲求」を抑圧し、それが満たされなければ、いつまでもそれに執着し、次の欲求に自然に移行していくことができない。理性によって、それを克服したつもりでも、固着した欲求はいつか歪んだ形となって爆発し、われわれを脅かすのである。

適当な時期に適度に基本的欲求が満たされないと、後々までもそれに病的に執着するようになり、そうした病的に歪んだ欲求を〈神経症的欲求〉と呼ぶ。そして基本的欲求の限界を超えた不満は、〈神経症的パーソナリティ〉を生み出すのである。

村上が指摘するような、過剰に拡大した人間の欲望は同時に満たされないという感覚を生み、それがさらなる

欲望の肥大化をもたらす過剰即不足というあり方は、神経症的パーソナリティが生み出す神経症的欲望のあり方であり、それは過剰即不足というより、むしろ不足即過剰すなわち欲望の抑圧がますます欲望を肥大化させると解釈すべきなのではないだろうか。

従って、そうならないためには、敢えて誤解を恐れずに言えば、われわれは自分のありのままの欲求に従って生きることが求められるのだ。そして、ありのままの欲求とは、理性によって仕分けされ、価値づけられ、加工された欲求ではなく、また欲求を抑圧することによって過剰にエネルギーが蓄積された不健全な欲求ではなく、自分の健全な身体が欲するありのままの欲望である。

欲望とは、それを抑圧することによって制御されるのではなく、むしろ、それを解放することによって制御されるのである。

欲望のサイクル

それでは、ありのままの欲望を解放する、あるいは、ありのままの欲望に従って生きるということとは、どういう状態を指すのだろうか。それは、単に本能に従って生きる動物のような状態に回帰することなのだろうか。あるいは、人間でありながら未だ意味も言語も自我ももたない新生児のような状態に戻ることなのだろうか。動物は、食べたいという欲求が起こったら、餌を探して食べ、眠くなったら眠るといように、欲求と行為との間にズレがない。またその間の葛藤もない。新生児も同様である。そこには運動感覚的な個性というものの自覚はあるかもしれないが、自我という個人意識はない。すなわち、意味あるいは概念によって、自分と世界とが分節化されてはいない。従って、動物も新生児も世界と融合し、一体化した状態を生きていると言える。世

界から分節された個的な自己ではなく、世界と連続した全体を生きているのである。そして、この状態は、マズローの言う最終的な人間の欲望の到達点である自己超越した状態と同じとも言えよう。その意味において、ありのままの欲望を解放し、それに従って生きるということは、動物や新生児のように生きることに言えなくもない。すなわち、自我を棄てて、動物や新生児のように、本能的に生きることが、人間の究極的な目標となるのである。

しかし、動物や新生児のような未分化な混沌状態と、人間の欲求の最終段階である自己超越した世界との融合状態とは、まったくそのあり様が違っている。マズローの欲求階層説もあくまでも人間の欲求を発達の見地から捉えたものであり、前段階の欲求が次の欲求に移行する際には、前段階の欲求を依然として含みながらも、それを超えて進化していくのである。それは、自然あるいは本能へ回帰していくというイメージとは、似て非なるものなのだ。

こうした欲求のベクトルは、マズローの欲求階層説を一つの母体として展開されているトランスパーソナル心理学において、さらに明確に論じられている。⁽⁵⁾

トランスパーソナル心理学の理論家であるケン・ウィルバーは、人間の心あるいは意識の状態をプレパーソナル、パーソナル、トランスパーソナルという三つの水準で捉えている。プレパーソナルとは、個としての自己を確立する以前の状態。すなわち動物や新生児のような状態である。パーソナルとは、個としての自己が確立した状態。近代がめざした自己のあり方とも言えよう。トランスパーソナルとは、個を確立した後、さらにそれを超えていく状態をさす。マズローで言えば、自己超越の段階である。ウィルバーは、この三つを区別した上で、人間の心の成長は、プレパーソナルを含んで超えて、パーソナルへ、パーソナルを含んで超えてトランスパーソナルへ、という順序で垂直的に発達していくと考える。そしてプレパーソナルとトランスパーソナルとは、「非・自

我的「非・理性的」「非・合理的」という意味では共通するが、実は両者は質的に全く異なるとした。なぜならば、プレパーソナルな状態は、単なる物質の融合状態であり、そこには自我や理性、あるいはソウルやスピリットも含まれてはいないが、トランスパーソナルな状態というのは、自我や理性にとらわれてはいないだけで、それを放棄したわけではなく、必要に応じてそれを使うこともできるからである。

さらにこれを認識問題として言えば、この三つの水準に応じて、リアリティが異なる姿で現れてくることになる。プレパーソナルな水準で見る世界とトランスパーソナルな水準で見る世界とは、その現れ方が違ってくるのだ。認識は自己の意識水準に応じて相対的に現れる。そして、低い意識水準からは、高い意識水準のリアリティの現れ方はわからない。しかし、高い意識水準からは、その水準のリアリティの現れ方があると同時に、低い意識水準でのそれをも理解することができる。なぜならば、すでに自分もその世界を経験してきているからである。この意味において、高い水準にあるものはリアリティを多重的に見ていることになる。ウィルバーによれば、それがトランスパーソナルⅡ個を超えているということであり、それはまた、個を無化することではなく、個でありながら個を超えていくということなのだ。

そして個でありながら個を超えていくというあり方、これは同時に個を超えていながら個であるというあり方とも言えるが、こうした個のあり様は、『般若心経』で言うところの色即是空・空即是色という世界観と通じるものである。ウィルバーは言う。

「形」の世界は、つねに、そしてすでに「完全な空」である（色即是空。つねに、そしてすでに現前するすべての条件の「条件」、つねに、そしてすでに究極のオメガであるが、それは万物の目標ではなく、万物の真如であ

る。ただ、これなのだ。探求は、つねに、そしてすでに終わっている。「形」は「神聖」の身ぶりとして永遠の劇を続けるだろう。スピリットを求めてではなく、あらゆる時、あらゆる動きにスピリットを表すものとして。⁽⁶⁾

トランスパーソナルの究極の状態において、この世の一切のものが個的なものではなく、実は完全なる空であることを知ると、この認識は同時に、その空が、この世の一切の個的なものに顕現していることに気づく（空即是色）。つまり、この世界の全てのものは、ただその姿のまま、つねに既に空の顕現として、肯定されていく。すべてのものは、聖なるものにほかならないのである。そして、このことは、パーソナルからトランスパーソナルへという上昇のベクトルが究極まで達すると、自ずとトランスパーソナルからパーソナルへという下降のベクトルの力が生じてくることを意味している。さらに、その力の源泉となっているものは、われわれの意志や理性ではなく、われわれ自身に、つねに既に組み込まれている自然な欲望なのである。

十住心思想における欲望のプロセス

このプレパーソナルからパーソナルへ、パーソナルからトランスパーソナルへ、さらにはトランスパーソナルからパーソナルへというプロセスは、密教において空海の十住心思想のなかにも見ることができる。

空海は、その著『秘密曼荼羅十住心論』あるいは『秘藏宝鑰』において、人間の心のあり方を十の段階に分け、それぞれの特徴について論じているが、それは人間の心が低次の段階から次第に高次なものへと転昇していくプロセスを明らかにしたものと考えられる。そして、次の住心への転昇は、その前の住心が基礎となつてはじめて達成されると解釈すれば、それは、第一住心から第十住心に至るまで、一連の段階的漸成的なプロセスで貫かれ

ており、究極的な心の完成である秘密莊嚴心も根本的にはその基礎として異生羝羊心が必要とするのである。

これを人間性心理学あるいはトランスパーソナル心理学の観点からみるならば、まず第一住心である異生羝羊心は、前述のマズローの用語に従えば、人間の「生理的欲求」の段階であり、最も低次ではあるが、人間のホメオスタシスを維持させるためには必要不可欠で人間存在の基本となる欲求に支配された心のあり方であると考えられる。この段階では未だ自我の自覚さえ芽生えておらず、謂わば、プレパーソナルな純粹本能的段階と言えよう。しかし、これが基礎となつて第二住心である愚童持斉心⁽⁷⁾がもたらされる。愚童持斉心とは、『秘蔵宝鑰』の頌に

愚童少しく貪瞋の毒を解して、

欸爾に持斉の美を思惟し、

種子内に薰じて善心を発す。

牙・疱相続して英軌を尚ぶ。

五常・十善漸く修習すれば、

粟散・輪王もその旨を仰ぐ。

とあるように、純粹本能段階から次第に持斉、あるいは五常・十善という社会的、宗教的な規範に目覚め、それに自己を従わせようとするのである。すなわち、自己の所屬する社会・文化内での対人関係、さらには対社会的関係を意識し、その規範を自己の内に取り込もうとする段階であり、社会・文化的位相における自我の確立の段

階すなわちパーソナルな段階であると捉えることができよう。空海が、この住心を一つの理想国家のあり方として結びつけて論じているのは、その証左でもあり、非常に興味深いことである。

さらにこの社会的・文化的位相における自我の確立が契機となつて、第三住心である嬰童無畏心に転昇する。

嬰童無畏心とは、外道人を厭い、凡夫天を欣う心なり。上、非想に生じ、下、仙宮に住して、身量四方由旬、寿命八万劫にして、下界を厭うこと瘡癩のごとく、人間を見ること蜉蝣のごとし。光明日月を蔽し、福報輪王に超えたりといえども、しかれどもなおかの大聖に比すれば、劣弱愚朦なることこの咳兒に似たり。小分の厄縛を脱るるが故に無畏なり。未だ涅槃の樂を得ざるが故に嬰童なり。⁽⁸⁾

このように説かれているが、嬰童無畏心とは、社会・文化的位相における自我の限界性に気づき、さらに永遠なる自己を追い求めようとする段階であると考えられる。これは社会・文化的位相における自我の確立をめざす第二住心のあり方に比べて、その限界を知り、さらにその呪縛から解放されようとする意味では、より高次なものである。しかしそこにおける自我あるいは自己は、未だ個我としての自我あるいは自己であり、他者との二元的世界を想定し、そこからの離脱をめざしているに過ぎず、さらには、そうした欲求は、

問う、もろもろの外道同じく三学を修してかの二界に生じ、空三昧を証して言亡慮絶す。何によつてか煩惱を断じ、涅槃を証することを得ざるや。答う、観、二辺に著し、定、二見を帶するが故なり。⁽⁹⁾

と説かれているように、有辺―無辺、常見―断見という二律背反的、あるいは二者択一的思惟のあり方を有していることから、自我の超越⇨トランスパーソナルには至っていないと考えられる。従って、この段階は自我の確立からその超越へと向かう過渡的段階であると位置づけることができよう。

以上、いわゆる世間三ヶの住心と呼ばれる心のあり方について、プレパーソナルからパーソナルへ、パーソナルからトランスパーソナルへという観点から見てきた。ここまでの段階では、まだ自我の超越は完成されていないのであるが、そのための必須の前提となるプレパーソナルからパーソナルへ、さらにはそこからの脱却への欲求というものが、空海の十住心思想において、重要なモメントとして説かれていることに注目しなければならぬであろう。そしてこのプロセスは、第四住心以降のトランスパーソナルな段階へと連なっていく。(第四住心以降のトランスパーソナル的視点からのアプローチは次回に譲る。)

また、空海の十住心思想において、九顕一密⇨浅略積にとどまらず、九顕十密⇨深秘積という解釈がなされていることも注目しなければならない。前者は、プレパーソナル⇨パーソナル⇨トランスパーソナルという上昇のベクトルに通じ、後者はトランスパーソナル⇨パーソナル⇨プレパーソナルという下降のベクトルに通じている。トランスパーソナルに至る以前の状態、なかんずくプレパーソナルな段階である異生羶羊心でさえも悟りの世界だとする密教的世界観は、まさにトランスパーソナルからパーソナル・プレパーソナルへと下降していくプロセス、そしてそこにおいてすべてのものが肯定されていくプロセスが解明されている。

そしてこのすべてのプロセスは、単に論理的な思惟による階梯ではなく、むしろ人間の持つ欲求が原動力となって進展していくと考えることもできないのではないだろうか。すなわち、より低位な欲求(住心)が満たされることによって、自ずから、それを超えたいという欲求、あるいはより高位な状態へ自己を引き上げようとする欲

求が湧いてくるのである。例えば、第一住心から第二住心へと転昇するのは、異生羴羊心を抑圧することによってではなく、それを満足させることによって自ずと次の欲求として愚童持斎心が起こってくるのである。

そのように考えるならば、これまでの仏教の説かれ方はあまりにも究極的到達点としての自己のあり方ばかりを強調しすぎていえるように思われる。仏教の目的が「悟り」にある以上、そこに主眼を置くのはある意味では当然のことだとも言えるが、かえって、それによってわれわれを「悟り」から遠ざけているのだ。

例えば、無我とは、決して自我の否定ではなく、自我の質的な転換であり、そしてそれは、パーソナルからトランスパーソナルへという段階的漸成的なプロセスを経て初めて達成される。そしてその根本には、プレパーソナルな欲求が潜んでいる。おそらく空海の十住心思想はこのプロセスを明確に意識して創られたものである。もし、宗教としての仏教が衆生の救済をめざすならば、社会・文化的位相において自我が確立していない者に初めから超越された自我を説いても何の助けにもならない。また、徒に欲望を悪なるものとして否定し、その克服あるいは制御ばかりを強調するのではなく、欲望の充足こそが実は心品を転昇させていく原動力になっているということを説いていく必要があるのではないだろうか。

おわりに

欲望に対する向き合い方は、その人が抱く人間観と深く結びついている。すなわち、人間を本質的に悪なる存在として見る消極的・悲観的立場に立つか、善なる存在として見る積極的・楽観的立場に立つかで、欲望へのスタンスも変わってくる。もし前者の立場に立つなら、理性によって、あるいは人為的な圧力によって、欲望は容赦なく圧殺され、抑圧されていく。しかし、いくら理性や人為的な圧力によって、欲望を克服したつもりになっ

ても、実は、それらは人間の体や心の深層に、澱のように、しかも歪められた力を蓄えながらふつと溜まっていく。やがて、その歪められた力は、われわれを破壊や殺戮や自己否定へと駆り立てていき、ついには精神的・肉体的な病理へと向かわせる。よしんば、堅固な理性や意志によって、それらを押しさえ続けることができたとしても、ひとたび、堰が切れたならば、その歪められた欲望は、われわれに容赦なく襲いかかってくるのである。たとえば、死の間際、人間の理性の壁が脆く朽ちかけたとき、その人は実現されなかった歪んだ欲望の脅威に晒される。まさに、生の最終局面において、とうに克服したはずの欲望によって、復讐され苦しめられるのである。もしかしたら六道を巡る苦の連鎖は、人間の無意識に潜む歪められた欲望の表象ではないだろうか。

もし、人間を本質的に善なる存在として見るなら、あるいは、善／悪という価値をも超えた、ただそれとして見ることができたなら、欲望は解放される。人間がもつありのままの欲望に対して、何ら後ろめたさを感じることもない。従って、われわれの体や心の深層に歪んだ力が蓄積されることもない。死の間際においても、われわれはただ、ふつと静かに溶けるように消えていくのだ。

註

- (1) 北京No.120, Vol.5, 163-24~6
『性と死の密教』田中公明著 春秋社 六六頁より引用
- (2) 北京No.120, Vol.5, 163-17~8
『性と死の密教』田中公明著 春秋社 六六頁より引用
- (3) 現代日本文化論12『内なるものとしての宗教』河合隼雄・村上陽一郎編 岩波書店 八頁
- (4) マズローの心理学については
- (5) トランスパーソナル心理学については
- 『人間の心理学 — モチベーションとパーソナリティ』A. H. マズロー著 小口忠彦訳 産業大学出版部刊
- 『完全なる人間』A. H. マズロー著 上田吉一訳 誠信書房
- 『人間の最高価値』A. H. マズロー著 上田吉一訳 誠信書房
- 『人間の完成』上田吉一著 誠信書房 等を参照

欲望の解放

- 『進化の構造 1・2』 K、ウイルバー著 松永太郎訳
春秋社
- 『意識のスペクトル』 K、ウイルバー著 吉福伸逸・菅
靖彦訳 春秋社
- 『魂のライフサイクル』 西平直著 東京大学出版会
- 『トランスパーソナル心理学入門』 諸富祥彦著 講談社
現代新書 等を参照
- (6) 『進化の構造 1』 ケン・ウイルバー著 松永太郎訳 春
秋社 六六二頁
- (7) 『弘法大師著作全集 第一巻』 勝又俊教編 山喜房佛書
林 一三八～一三九頁
- (8) 『弘法大師著作全集 第一巻』 勝又俊教編 山喜房佛書
林 一四〇頁
- (9) 『弘法大師著作全集 第一巻』 勝又俊教編 山喜房佛書
林 一四三頁
- 〈キーワード〉欲望、ブレパーソナル、パーソナル、トランス
パーソナル